

宗教批判の立脚点

—フォイエエルバッハの場合—

序

近代哲学の流れは、人間が中世の神中心的な立場から脱れて自らを無限に拡大せんとした動きであるとみることが出来る。一応、近代哲学の完成者はヘーゲルであると考えることが出来るが、彼の思想のなかには人間精神と神的精神との同一性の立場が強く打ちだされているといえる。すなわち、人間の最高の認識は神の自己認識にほかならないということである。然し、かように神と人間とが精神において同一性の立場にあると考えれば、そこから当然のことながら人間の精神がその最高の段階に登りつめるならば、それ自体として神にまで到ることができるといふこと

寺 崎 峻 輔

が結果するであろう。そこから必然的に神の本質は人間の本質の投射にすぎず、宗教は人間学に帰着しなければならぬとの立場が生れてくると考えられる。その口火を切ったのがシュトラウスであり、その徹底化をはかったのがフォイエエルバッハであったということが出来る。このため、ここでは神学を人間学にもとづけながら宗教批判を敢行したフォイエエルバッハの立場を考察することとする。

一

フォイエエルバッハの宗教批判の立脚点は、宗教の本質が人間の本質にほかならないということである。すなわち、彼の立場は「宗教の内容と対象とが徹底的に人間的なるも

のであるということ、神学の秘密が人間学であり、神の本質の秘密が人間の本质であること」を明らかにすることにあったといえる。それではフォイエルバッハは、神学の秘密である人間の本质をどのように考えているのであろうか。

フォイエルバッハによれば、人間を動物から本質的に區別するものは意識であると考えられる。然しその意識は通常考えられているような一般的な意識ではなく、厳密な意味での意識である。というのは、広い意味での意識、すなわち自己感情とか感性的な識別力とかは動物においても認められることができるからである。それ故に、人間だけがもっている意識とは、自己の類や本質性が対象となるような意識であるということが出来る。動物も個体としては自らを対象化することが出来る。然し、彼等は類としての自己を対象化することはできないのである。すなわち、動物には自己感情はありえても、自分の名前を知らず引きだすような意識はありえないといえる。ところで、かかる人間だけがもっている類の意識とは、フォイエルバッハによれば、科学のための能力であると考えられる。すなわち、類の意識とは、あるものをその類や本質性から理解する科学にはかならないからである。人間は生活面では個体と交渉する

が、科学においては類と交渉する。然してかかることが可能であるのは、人間が自分の類や本質性を対象とすることが出来るからである。

かくして動物は一重の生活を送るだけであるが、人間は二重の生活を送る。すなわち、動物においては内的生活と外的生活とが合一しているが、人間においては内的生活および外的生活を送ることが出来るのである。ところで、人間の内的生活とは人間が自らの類や本質性にたいして関係する生活のことである。人間は内的生活において自らと会話をする。動物は、自分のそとに別の個体がなければ類としての機能を果たすことができない。然し人間は、他人がいなくても考えるとか話すとかいう類的機能を営むことができるのである。従って、人間は自分自身で同時に私であり君であるということが出来る。すなわち、人間は他の個人とともにあるだけではなく、自分自身を他人の地位におくことができるのである。それは人間においては自己の類や本質性が対象であって、たんに人間の個性が対象であるだけではないからである。

かくして、フォイエルバッハによれば、人間は自らの類の本質を意識しているものとして扱えられる。それではわれわれ人間が意識しているところの人間の本质とは何であ

るのであろうか。人間のなかにある本来の人間性とは何であるのであろうか。フォイエルバッハによれば、それは理性と意志と心情であると考えられる。人間には思惟の力、意志の力、心情の力が具っている。理性と意志と愛とは人間そのものの絶対的な本質であり、最高の力である。われわれは思惟し愛し意欲する。われわれは認識するために認識し、愛するために愛し、意欲するために意欲するともいえるのである。それらは人間そのもののなかにあり、それらが必要ならば人間は何ものでもなくとも考えられる。人間が人間であるのはただ理性と意志と愛とによるのである。それ故に、それらのものは人間の本質を基礎づけるものとして、絶対的な力であると考えられる。

かくして、フォイエルバッハによれば、人間の類的能力として理性と意志と心情とが挙げられる。然してそれらのものは、人間の本質を基礎づけるものとして、それ自身で存在し、完全であり神聖であると考えられる。理性と意志と心情とは、人間のなかにありながら個々の人間の上にあるものである。それ故に、それらのものは類的本質として、有限な個人のなかに制限されるものではないのである。ここからフォイエルバッハは、個としての人間と類としての人間とを区別する。すなわち、個としての人間は不

完全で一時的なものであるが、類としての人間は完全で無限なものである。類としての人間は、個としての人間の本質であり、人間そのものの絶対的な本質であるといえるのである。このため人間の本質である類的能力を制限するのは誤謬にもとづくと考えられる。人間の個体が自らの有限性を意識するのは、類的完全性と無限性とが彼の対象となっているからである。従って、個体の絶対的本質である類的本質を制限されたものと考ええることは、明らかに欺瞞であるといえるのである。

かくして、フォイエルバッハによれば、人間の類的能力としての意識は無限の性質を有することとなる。無限者の意識は意識の無限性にかんする意識にはかならない。それ故に、もしわれわれが無限者を思惟するならば、そのときわれわれは思惟能力の無限性を思惟するのである。またわれわれが無限者を情感するならば、そのときわれわれは情感能力の無限性を情感しているのである。人間は対象において自己自身を意識する。対象の意識とは人間の自己意識にほかならないのである。それ故に、無限者を意識する宗教は、人間が自己の本質についてもっている意識であるといえることができる。すなわち、宗教の対象は人間の自己意識にほかならないといえるのである。

二

かくして、フォイエエルバッハによれば、宗教の対象は人間の自己意識と一致する。感性的対象は人間のそとに現存するが、宗教の対象はそれ自身内面的な対象である。それ故に、宗教の対象は良心と同じように人間と切っても切れない関係にある。すなわち、宗教の対象は人間にとって最も親密な対象であり、最も近い対象といえるのである。

ここから、フォイエエルバッハによれば、宗教の対象はわれわれに最も近いものとして人間の対象的本質そのものにほかならないということが結果する。すなわち、神の本質は人間の思惟および人間の思念と同じものなのである。

「人間の神は人間がもっているだけの価値を有し、それ以上の価値は有しない。神の意識は人間の自己意識であり、神の認識は人間の自己認識にほかならない」。われわれは人間の神から人間を認識し、また人間から人間の神を認識するのである。すなわち、われわれにとって神であるものはわれわれの精神や魂であり、われわれの精神や魂はわれわれの神であると考えられる。神は人間の内面があらわになったものであり、人間の自己がいいあらわされたものである。従って、宗教とは人間が自らの本質にたいしてとる

態度にほかならない。神の本質とは人間的な本質であり、人間の本質が個々の人間の制限から引き離されて対象化されたものなのである。それ故に、神の本質の規定は人間の本質の規定であるといえるのである。

然し一般の宗教の立場はかかる考えに反対する。すなわち、神の無規定性や神の人間との断絶を主張するのである。それ故に、フォイエエルバッハはかかる考えを批判し反駁する。

先ず世の宗教には、神の規定を誤りとし、神の無規定性や認識不可能性を主張するものがある。然し、何らの規定をもたないものはわれわれにたいして何らの働きかけもたず、何らの働きかけもたないものはわれわれにとって何らの現存在ももたないものといえる。すべての規定を廃棄するのは存在者そのものを廃棄するのと同じである。規定をもたない存在者は非対象的なものであり、非対象的なものは虚無的なものにほかならない。それ故に、神からすべての規定を引き離してしまえば、神は人間にとってたんに消極的で虚無的なものにすぎないこととなる。然し、真実に信心深い人間にとっては神は何らの規定をもたないものではない。というのは、真実に信心深い人間にとっては神は確実に現実的なものだからである。従って、神が規定

をもたず認識されないということはむしろ不信仰のあらわれだと考えられる。

次に世の宗教には、神の規定を認めながらも、神の自体における存在と人間にたいする存在とを区別するものがある。すなわち、神は人間にあらわれる仕方でのみあらわれるのであるから、それと神そのものとは異なるというのである。然し、フォイエルバッハによれば、かかる神の自体における存在と私にたいする存在とを区別することは根拠のない区別であると考えられる。というのは、かかる区別を設けることができるのは、神が現にあらわれているのとは別の姿であらわれることが可能であるということを前提にしているからである。然し、われわれは実際には神が私にたいしてあるところの神とは別のものであるかどうかを知らることができない。むしろ、私にたいしてあるような神こそが私にとって神の全てなのである。神は私にたいして存在することができるような姿で存在し、他にあらわれようのないものとしてあらわれるのである。従って、神の自体における存在と人間にたいする存在とを別けることは幻想にすぎないと考えられる。

かかる批判をとおして、フォイエルバッハは神が規定をもち、その規定と人間の本質の規定とが同一であることを

明らかにする。すなわち、神の述語である完全性や無限性が人間の類の本質の述語であることを証明するのである。

ところで、フォイエルバッハによれば、神と人間の本質が同一の述語であらわされるといふことは、主語としての両者が同一のものであることを意味すると考えられる。述語は主語の真実態であり、述語の同一性は主語の同一性をあらわすのである。従って、神とは人間の対象化された本質であり、それ以外の何ものでもありえない。それ故に、人間が神的特性としての愛を信ずるのは、人間自身が自らを愛しているからにはかならない。また人間が神は賢明で慈愛深いものであると信ずるのは、人間自身が自らについて悟性と慈愛とを最もよいものと思っているからである。

かくして、フォイエルバッハによれば、神とは人間の自己対象化によって生みだされたものである。然るに、世の宗教は神と人間との両極を考える。すなわち、神は完全で無限であり、人間は不完全で有限であるとされる。然しこのことは、フォイエルバッハによれば、人間を類としての人間と個としての人間とに分離することによると考えられる。というのは、神が人間の類の本質であるかぎり、宗教における神と人間との関係は人間と人間自身との関係にほかならないからである。然るに宗教においては、人間にも

ともと属している類的本質を人間から分断して独立させる。それ故に、宗教においては人間の類的本質は神へと奪われ、人間は類を失った不完全な個としての人間とされるのである。然しこのことは、フォイエルバッハによれば、人間にもともと属していたものが人間から疎外されたものとして、人間自身の分裂にはかならない。従って、人間が宗教における自己疎外から脱するためには、神が人間であること、対象化された人間の本質であることを自覚しなければならぬのである。

かかる論を展開することによって、フォイエルバッハは、宗教の秘密が人間学であること、宗教の本質の秘密が人間の本質の秘密であることを明らかにする。すなわち、宗教においては神を第一のものとし、そこから人間の問題も展開させるが、その関係は逆倒されねばならないと考えられるのである。人間にとっては、第一のものは神ではなく類としての人間である。それ故に、フォイエルバッハの立場はすべてを類としての人間に帰着せしめるものとして、人間を神の位置まで高めるものといえる。「人間は人間にと

って神である——これが最上の実践的命題である」とのフ
ォイエルバッハの言葉は、彼の宗教批判の立場を最も端的
に示しているものといえるのである。

結

以上、簡単ながらフォイエルバッハの宗教批判の立場について考察した。それは宗教の本質が徹底的に人間的なものであること、すなわち人間の本質にかならないということであった。然し、かかる宗教の人間化が近代のはらんだ当然の帰結であるとしても、その公然たる表白は当時の人々の激しい批難をあびたことも事実である。背信の徒の叫びは、彼等にとっては悪魔の声と映したのである。然し、宗教家の虚飾と虚偽を暴きたてんとするフォイエルバッハの立場は、やがてその追隨者を多く輩出させることとなった。悪魔の声は時代とともに拡がり、やがて神の死を宣言する人々の登場となるのである。

(本学助教授、倫理学)